

トピックス

新しいパーキンソン病治療薬の現状

神経内科の病気の中でパーキンソン病研究は最も進んでおり、この40年ほどの間に多くの治療薬が登場しています。今回は新しい治療薬と現在進行中の新薬についてお話しします。

効果が早い 自己注射薬

昨年8月にアポカインというインスリンと同様な自己注射薬が発売されました。現在の治療薬を服薬しても効果が現れない時や、突然効果が切れて動けない時に注射をします。

注射は1日に5回まで認められており、効果は通常10〜15分位で発現し、1時間ほど持続します。

効果のある間にメネシットなどのドパ剤を頓服するか、前倒しに服薬すると良いでしょう。自分の意志に関わりなく体が動くジスキニアの症状がある患者さんは時に増悪することがありますが、上手に使用すると体の動きはかなり良くなります。外国ではもっと持続時間が長い同じ薬が使用されていますが、日本ではまだ試験は行われていません。

1日1回で作用持続 ドパミンアゴニスト の徐放剤

最も期待できるのはドパミンアゴニスト（ドパミン受容体刺激剤）の徐放剤です。徐放剤は、薬

効成分が徐々に溶け出す工夫をすることで効果を持続させるのが特徴。昨年からレキップCR錠と呼ばれる治療薬が発売になっていました。1日1回で事足りるので、仕事を待つ人などは飲み忘れを防ぐため、便利です。

同様の薬ではミラペックスが1年半ほど前に発売されています。2つの薬とも持続性があるので、症状の日内変動がある人は効果が期待できます。

症状の日内変動に 効果 新しい貼付薬

ニューロプロという新しいドパミンアゴニストが、貼付薬として

この春ごろに市販されます。1日1回、体に貼るだけでよいので飲み薬の数が多い人には朗報でしょう。難点は貼った部位にかゆみや発赤が出ることがあり、このために中止せざるを得ない場合がある点です。持続性があるので、症状の日内変動がある人は効果が期待できます。

一方、レキップの貼付薬は日本で開発され、現在試験中の薬です。まだ試験初期なので結果は出ていませんが、ニューロプロと比べて皮膚反応の副作用が少ないようです。

これ以外にも多数の薬の試験が行われており、パーキンソン病治療の将来は明るいと言えます。